

にちょうどよい位置を見つけ出し、腰をおろした。とたんに今まで忘れていた疲れがこみあがってくる。気を張っていないければこのまま眠ってしまいそうだ。

言峰がおなじように腰をかけ、その距離にバゼットは身体の奥がすくむを感じた。理由を見いだそうとしたがわからない。思えば他人との距離を意識したのも初めてだ。身体が触れているわけでもなく、他人とこれより近づいたことなどいくらでもあるのに、どうしていいのかわからなくなる。膝をかかえるふりをして、バゼットは自分の身体を支え、動揺をさとられまいとした。

木の曝げる音が響く。ゆっくりと火を味わえるのはひさしぶりだった。火が身体をあたたためてくれ、緊張を溶かしてくれる。

「少ししたら、交代で見張りに立とう。異存は」

「ありません」

安堵がわりの溜息が出た。思えば仲間を失ってから丸一日歩きづめでろくに休んでもいない。これくらいのことですべては駄目だとも思うが、警戒せずに休めるのはありがたかった。

言峰が携帯瓶を差しだしてくれる。

「飲むか。ただの水だが」

両の手で受け取ってから、子供っぽい仕草だったかと思う。こうして隣に座っているとあらためて言峰の身体の大きさと成熟した仕草を思い知る。顔にはわずかな疲れがうかがえるものの、芯のある顔つきと動きとで完璧に覆い隠している。精神の不屈さは年齢だけが生み出したものではないだろう。

口にした水はぬるかったが、どんな水よりも澄んだ味を持ち、深く身体に染みこんできた。

「執行者になってどのくらいだ」

言峰が手近にある枝を炎にくべ、火の具合を眺める。その背後、あかるく浮かびあがった中を貫く人影が、樹木に沿って空を目指している。

「二年です」

「それであの技量か。たいしたものだ」

言葉の真意をはかろうと見あげたバゼットを、色のない表情が出迎える。強引な解釈だが、言峰は世辞でなく本当に自分を評価してくれているのだとバゼットは嬉しくなった。協会に飛びこんで以来ひききかれていた自尊心がようやく満たされたような気さえ起こった。